小説家の檻

斜田　章大

登場人物

遠野雪子　２５歳。女性。作家志望。

遠野雪音　小説を執筆するＡＩ。

裏地啓介　２９歳。男性。本を読むと吐く。

遠藤幸太　２６歳。男性。弁当店経営。遠野雪子とは交際して３年。

早川頼子　２５歳。女性。編集者。雪子、幸太とは大学時代からの付き合い。

前原太一郎　３８歳。男性。作家。

後田晴彦　２５歳。お笑い芸人。

文字列　アンサンブル。４〜８名程度。時に、群衆。時に生徒。時に雪子の内面。

一〇〇問小説　質問一覧

Q1　貴方の性別は？
Q2　生年月日を入力してください。
Q3　血液型を入力してください。
Q4　現在の職業を入力してください。
Q5　人生に影響を与えた本を五冊以内で列挙してください。
Q6　長く続いた趣味を五個以内で列挙してください。
Q7　人に自慢できる特技を五個以内で列挙してください。
Q8　打ち込んできたスポーツを五個以内で列挙してください。
Q9　感銘を受けた映画を五個以内で列挙してください。
Q10　男と女ではどちらの方が得だと思いますか？
Q11　過去と未来ではどちらのことをよく考えていますか？
Q12　善と悪ではどちらの方が自分に近いと思いますか？
Q13　月と太陽ではどちらの方が自分に似合うと思いますか？
Q14　空と海ではどちらの方に惹かれますか？
Q15　おはようとさよならではどちらの方が悲しいですか？
Q16　嘘と真ではどちらの方が現実に近いですか？
Q17　犬と猫ではどちらの生き方が好きですか？
Q18　右と左ではどちらを直感的に選びますか？
Q19　笑顔と泣き顔ではどちらの方が素顔に近いですか？
Q20　座右の銘を教えてください。
Q21　尊敬する偉人を教えてください。
Q22　初恋をした時の年齢を教えてください。
Q23　家族構成を教えてください。
Q24　思い出の場所を教えてください。
Q25　好きな食べ物を教えてください。
Q26　好きな異性のタイプを教えてください。
Q27　好きな季節を教えてください。
Q28　好きな色を教えてください。
Q29　好きな音楽のジャンルを教えてください。
Q30　チャンスが訪れた時、慎重になりますか？　大胆になりますか？
Q31　大きな障害が現れた時、立ち向かいますか？　逃げ去りますか？
Q32　好きなものには積極的に近づきますか？　遠くから見ていますか？
Q33　理不尽な目に遭った時、怒る方ですか？　悲しむ方ですか？
Q34　もしもタイムマシンがあったら、未来に行きますか？　過去に行きますか？

Q35 終の棲家としたいのは、都会ですか？　田舎ですか？
Q36 心から安心できるのは一人でいる時ですか？　大勢でいる時ですか？
Q37 死後に自分が行くのは、天国だと思いますか？　地獄だと思いますか？
Q38 どちらかといえば自分は、幸福だと思いますか？　不幸だと思いますか？
Q39 本のすべてが詰まっているのは、冒頭だと思いますか？　末尾だと思いますか？
Q40 生きていく上で最も大切なことは何だと思いますか？
Q41 魂の存在を信じますか？　またそれはどこに宿るものだと思いますか？
Q42 動物と人間では命の価値に差はあると思いますか？　また植物ではどうですか？
Q43 「生きている」の定義は何だと思いますか？「死んでいる」との明確な差はどこにあると思いますか？
Q44 生きる価値の無い人間はいると思いますか？　またもしいるとしたら、それはどのような人ですか？
Q45 人生に絶望したことはありますか？　またある場合は、何が原因でしたか？
Q46 死刑についてどう思いますか？　賛成にしろ反対にしろ理由まで記載してください。
Q47 自分の愛する人、一人の命と、見知らぬ人、一〇〇人の命。どちらが重いと思いまか？
Q48 生きることが辛いと思いますか？　YES の場合はいつから辛いと感じるようになりましたか？
Q49 人はなんのために生きるのだと思いますか？
Q50 質問と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q51 希望と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q52 青空と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q53 恋愛と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q54 男性と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q55 女性と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q56 家族と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q57 時間と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q58 虚飾と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q59 戦争と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q60 平和と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q61 競争と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q62 正義と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q63 財宝と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q64 欲望と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q65 罪悪と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q66 都会と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q67 農業と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。

Q68 最初と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q69 最後と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q70 建前と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q71 本音と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q72 幻想と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q73 自由と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q74 理想と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。
Q75 もしも別人になり代われるとしたら誰になりたいですか？
Q76 もしもタイムマシンがあったらどの時代に行きたいですか？
Q77 もしも生まれ変われるとしたら次は何になりたいですか？
Q78 もしも無限にお金が使えるとしたら何がしたいですか？
Q79 もしも貴方が神様だったら世界をどのように作りますか？
Q80 自分は人として優れていると思いますか？ 〇から一〇〇点でお答えください。
Q81 今の自分の人生にどれくらい満足していますか？ 〇から一〇〇点でお答えください。
Q82 家族にどれくらい恵まれていると思いますか？ 〇から一〇〇点でお答えください。
Q83 友人、恋人、配偶者にどれくらい恵まれていると思いますか？ 〇から一〇〇点でお答えください。
Q84 自分は幸運だと思いますか？ 〇から一〇〇点でお答えください。
Q85 自分は嫉妬深いと思いますか？
Q86 自分は強欲だと思いますか？
Q87 自分は暴食しがちだと思いますか？
Q88 自分は傲慢だと思いますか？
Q89 自分は怒りっぽいと思いますか？
Q90 自分は色欲が強いと思いますか？
Q91 自分は怠け癖が強いと思いますか？
Q92 自分は悲観的だと思いますか？
Q93 自分はとろいと思いますか？
Q94 自分は罪深いと思いますか？
Q95 貴方自身をたった一つの単語で表すと何になりますか？
Q96 貴方は動物だと何に似ていると思いますか？
Q97 貴方に似合う天気は何ですか？
Q98 貴方の感情のうち、喜怒哀楽で1番強いのはどれですか？
Q99 貴方はどうしてこの本を買おうと思いましたか？
Q100 貴方にとって幸せとは何ですか？

小説家の檻

0

まず、暗闇。不意に声が聞こえる。

頼子　文字？
雪子　うん、文字。文字になりたい女の子の話なんだけど

明かりがついていく。とある出版社の片隅にある小さな部屋。頼子と雪子が向かい合わせで椅子に座り話をしている。机には、コーヒーの入ったマグカップと原稿。雪子が直筆で書いたものだ。それを頼子が読んでいる。

頼子　……文字ねぇ
雪子　うん
頼子　……ごめんね、雪子。やっぱり、これじゃあよく分からないよ
雪子　そ、そっか……
頼子　あ、そのね。アイディアはいいと思うのよ？　でもね、いいアイディアだからこそ、実現するのは難しいというか……
雪子　うん
頼子　だからね、私としてはそのね……一度別の路線で考えてみたらって、思うの。ほらこれはこれでいいと思うんだけどね、ほら、気分転換……？　みたいなさ。別の路線で考えてるうちに、色々と閃くこともあると思うし
雪子　うん……そうだね。頼子がそう思うなら、そうしてみようかな
頼子　雪子はその……さ。セオリーみたいなの守らないじゃない？　それはそれで、勿論、雪子の文章の持ち味だと思うんだけど……一度そういうの守って書いてみたら？　やっぱりセオリーっていうのはさ、きちんとした理由があるから、セオリーになってるわけで……一度そういう風に書くのも、勉強になると思うんだ
雪子　……うん。そうだね……ありがとう、頼子

そこに30代半ばほどの男性が通りかかる（前原）。高級そうな身なり。

前原　お疲れ様
頼子　あ、先生お疲れ様です
前原　あれ、持ち込み？

頼子　はい、私の友人で……遠野雪子さんです
前原　そう……（雪子に）頑張ってね

前原、周りの人々に二、三声をかけ、奥へとはけていく。

雪子　今の……
頼子　うん。作家の前原太一郎先生
雪子　テレビで見るより痩せて見えるね……
頼子　ほら少し、横に広がるらしいから
雪子　そうなんだ
頼子　じゃあ雪子、今日は……
雪子　え？
頼子　あ、だから、先生みえたし……そろそろ
雪子　あ、ごめんね

雪子、慌てて立ち上がり、荷物をしまう。その際、誤って原稿にコーヒーをこぼしてしまう。原稿に汚らしい染みがゆっくりと広がっていく。

雪子　あ、
頼子　あ、
雪子　ごめんなさい！（慌てて片付け始める）
頼子　大丈夫？　火傷してない？
雪子　うん……ごめんなさい
頼子　（原稿に気付いて）あ、
雪子　（乱暴に原稿を片付け、ごまかすように）……いいの
頼子　あ、うん……その
男　　大丈夫ですかー？

男が雑巾を持って登場。

雪子　すみません

雪子、雑巾をもらい、原稿と机を拭き始める。

頼子　あ、私やるよ
雪子　私がこぼしたから

雪子、いささか執拗に、丁寧に机を拭く。

雪子　水場……借りていいかな？
頼子　片付けとくよ
雪子　でも
頼子　ほら……部外者はその……
雪子　あ……ごめんなさい
頼子　いいって。それより、良かった？　その（原稿を見る）
雪子　（笑顔で）ただの紙だし……それにほら没だから
頼子　……
雪子　頼子、今日は本当にありがとうね
頼子　ううん。また書けたら真っ先に私に読ませてね
雪子　忙しいのにごめんね
頼子　何言ってるの。新しい作家を発掘するのが、私の一番の仕事だから
雪子　ありがとう
頼子　じゃあまたね
雪子　またね

雪子が、部屋を出る。そのまま、廊下を渡り、玄関へ向かう。その最中、

男　先輩も大変っすよね
頼子　え？
男　忙しいのに
頼子　原稿読むのが私の仕事だから
男　だいたいうち、原則ＮＧでしょ？　持ち込み。まぁよっぽど、実績あれば別ですが。
　あれじゃあ
頼子　ちょっと。雪子は私の友達なんだから
男　……苦労しますよね
頼子　なに
男　作家志望なんて、友達に持つと

雪子が外に着く。ふと、空を見上げて。

雪子　雨……

傘を差す雪子。気が付くと周りには色とりどりの傘を差した通行人達が歩いている。

雪子　雨は好きだ
文字　少なくとも、晴れの日よりは
文字　特に夏の日の晴天は苦手
文字　ギラギラと光る太陽に照らされていると、
文字　なんだか自分は罪人なんだと
文字　咎められている気持ちになる
文字　でも、
雪子　本当に好きなのは雪の日
文字　毎日雪が降ったっていい
文字　真っ白に世界を埋め尽くす雪は
文字　世界をシンプルにしてくれるみたいで好きだ
文字　あ、だけど
文字　雪の日のあとは、よく滑って転ぶからなぁ
文字　それに雪が降ると電車もバスも遅れてしまう
文字　私の都合で迷惑かけるのは申し訳ない
文字　文字
雪子　雪の代わりに文字が降ったらいい
文字　雪の代わりに雪という文字が降って
文字　道という文字の上に積もって
文字　その上を歩くと
複数　「ざくざく」
文字　という文字が躍るのだ
雪子　きっと楽しいぞって私は思う
文字　それにしても不思議だ
文字　私の心の中は
文字　こんなにもたくさんの文字に溢れているのに
文字　いざ人を目の前にすると
文字　いざペンを持って原稿に向かうと
文字　どうしてこうも
文字　なにもかも真っ白になってしまうのだろう
文字　文字
文字　私はきっと
文字　文字になりたいって願っている
文字　だって違和感があるから

文字　いつだって違和感があるから
文字　ただ息を吸うだけで
文字　ただ水を飲むだけで
文字　ただ物を食べるだけで
文字　たた人に触れるだけで
雪子　自分はここにいていいのだろうかって、私は思うのだ

立ち止まる。気が付くとそこは小さなバス停。申し訳程度の屋根と、錆びた看板、時刻表。屋根の下には先客が一人。スーツ姿の胡散臭そうな男が立っている。
雪子は傘をしまい、時刻表に目を向ける。
と、

裏地　残念でしたね

男が急に話しかけてくる。

雪子　え？
裏地　（貼り付けたような笑顔で）さっき行ったとこなんです。バス
雪子　あぁ

雪子、鞄から原稿を取り出す。コーヒーの染みができ、くしゃくしゃになってしまった原稿。それをせめてもと、伸ばしている。

裏地　ひょっとして、作家先生？
雪子　え？
裏地　それ。……それにほら、そっちって確か、大きな出版社あるから
雪子　……作家志望です
裏地　あぁ、なるほど。持ち込みってやつですか
雪子　……はい
裏地　まだあるんですね。そういうの

しばらくの間。遠くからは雨の音。しとしとと、降っている。

雪子　あ、あの
裏地　はい？

雪子、裏地にくしゃくしゃになってしまった原稿を差し出す。

雪子　もし……良かったら読んでくれませんか？
裏地　はい？
雪子　いや、その、本お好きなのかなって
裏地　本は大嫌いです
雪子　そ、そうですか……

原稿を引っ込めようとする雪子。しかし、それより先に、裏地が原稿をひったくってしまう。

雪子　え？
裏地　大嫌いなんですけどね。大嫌いな分、小説の目利きには自信あるんですよ
雪子　はぁ
裏地　（貼り付けたような笑みで）僕で良ければ読みますけど
雪子　あ、では……その、良かったら

裏地、原稿に目を落とす。雪子はそれを伏し目がちに見ている。

裏地　直筆ですか……
雪子　パソコン苦手で……
裏地　コーヒー？
雪子　さっきこぼしちゃって
裏地　はぁ……
雪子　私の……大学時代の友人が、文芸雑誌の編集をやっていて……それで、その、今日見てもらったんですけど。ただ、これもまだ途中書きで
裏地　（黙々と読んでいる）
雪子　文字になりたい女の子の話なんです。でも、周りの人が文字になるのを引き止めて、それで……

突然、裏地が原稿の上に嘔吐する。

雪子　え？　……え!?
裏地　おえええ!!
雪子　だ、大丈夫ですか？
裏地　（けろっと）大丈夫です！　ごめんなさいね、僕、物語を読むと吐いちゃう体質で

雪子　え？　は？　え？
裏地　しかしね、これはっきり言いますけど物凄いつまらないですね
雪子　そうですか……
裏地　正直意味わかんないですね、この話。文体もなんだか、妙に回りくどいし
雪子　はい
裏地　なんで貶されてるのに笑ってるんですか
雪子　あんまりここまでズバズバと言われることも少ないので
裏地　小説書き始めて何年ですか
雪子　小学校の頃からなんで、十年以上
裏地　じゃあ才能がないですね。やめた方がいいですよ
雪子　そうですね……私もやめた方がいいと思います
裏地　……
雪子　……
裏地　なんで作家なんかになりたいんですか？
雪子　え？
裏地　今のご時世、正直儲かりませんよ？
雪子　知ってます
裏地　じゃあなんで
雪子　夢なんです。小学校の頃からの
裏地　はぁ……
雪子　「きいろいくも」って本を小学校の頃に、読んで。それが凄い好きで……ちょっと大袈裟かもしれないですけど、その本で人生が変わったって思ってるんです。それで、同じように私も他人に影響を与えられたらなって
裏地　人生に影響ね
雪子　はい
裏地　でも、本なんていい影響を与えられるか分からないでしょ？　貴方の本を読んで自殺する人もいるかもしれないし、極論、人を殺してしまう人だっているかもしれない。その辺どう思ってるんですか？
雪子　そうなったら……悲しいですね。でもやっぱり、私の本を読んでくれたら幸せだなって思います
裏地　そうですか
雪子　はい……
裏地　……名前
雪子　はい？
裏地　名前、なんていうんですか？
雪子　遠野雪子です……

裏地　作家にどうしてもなりたいですか？
雪子　え？　はい……
裏地　作家になるために、本を書くためのペンを変えても……作家になりたいですか？
雪子　ペン？　……ですか？　はい、それは構いませんけれど
裏地　では、そのペンに意思があったらどうですか？
雪子　え？
裏地　意思を持ったペンを使ってでも、貴方は作家になりたいですか？
雪子　あ、あの……
裏地　なんです？
雪子　貴方……誰なんですか？

その質問に対して、やはり貼り付けたような笑顔で胸を張り、裏地が答える。

裏地　裏地啓介。職業はゴーストライターです

胸元からペンを差し出す裏地。雪子は逡巡の末、それを受け取る。
物語が始まる。

どこかの時。どこかの場所。遠野雪音が立っている。

雪音　最初。最初。最初。
私は最初の意味を知らない。
勿論、辞書的に最初を説明することはできるけれど。
「一番初め、最も初めであること。対義語は、最後」
でも、何をどれだけ分かったら、私たちは「最初」を理解できるのだろう。
誰かの性別を、誕生日を、血液型を、好みを、そして夢を知っていても、その誰かを理解することなんてできないように。
とにかく最初、
最初に、遠野雪子について語ろうと思う。
遠野雪子、当時25歳。魚座のAB型。夢は作家になること。好きなものは本と雪。
そもそも雪子という名前は、彼女が生まれた日に、記録的な積雪を観測したことから取られた。彼女はこの日、裏地啓介と出会い、そしてそのちょうど一年後、高層ビルから身を投げる。
この話は、つまり、彼女がその高層ビルに辿り着き、地面に落ちるまで。あるいは、その一年間で遠野雪子に訪れた栄光と没落についての物語である。
第壱幕　遠野雪子、作家になる

空から文庫本が降ってくる。それは一枚の紙のようにヒラヒラと舞うことはなく無慈悲に地面に叩きつけられる。
落ちた先は、スクランブル交差点。周りからは車の音。信号から響く「通りゃんせ」の平坦な電子音。気が付けば舞台にはそれぞれの理由で、どこかしらの方向へバラバラに歩く群衆。あるものは一人で、あるものは複数で。一人のサラリーマン風の男が、小走りで道を通り抜け、その際文庫本を踏みつけるも、気にせず駆けていく。
やがて一組の男女が、文庫本の前を通りかかる。女が、足を止め、その本を手に取る。

女　……「小説家の檻」遠野雪子著
男　え、なに？
女　あぁ、昔流行ったね、これ。覚えてる？
男　いや……知らないけど
女　知らない？　五年くらい前かなぁ、テレビとかでもよく見たけど
男　そう

女　流行ったんだけどねかなり。最後はあんなことになっちゃったけど
男　あんなこと？
女　好きだったんだけどなぁ。この本……

男、女の言葉を待たずに歩きだす。女は名残惜しそうに手に持った本を見つめるが、結局、その本は元あった場所に置き、男の後を追う。
スクランブル交差点を行き交う群衆……彼らが消える頃、それに紛れて二人の傘を差した人影が舞台の中央に現れる。雪子と裏地だ。
突如として雨の音。
二人は、どこかへ向かって歩いているように見える。

裏地　ゴーストライター……といっても、なにも僕が書くんじゃない。だいたい身分を隠すということは、それだけ立場が低いということでね。当然、単価も安くなる。僕がやってたら儲けが出ない
雪子　じゃあ、誰が書いてるんですか？
裏地　それは実際に見た方が早い。さて、着いた

歩くのをやめる二人。ぼろぼろの家を指して裏地が言う。

裏地　紹介しよう、ここが僕の仕事場だ
雪子　……ここですか
裏地　あぁ、職場兼自宅なんだ。小汚く思うかもしれないが、気にしないでおくれ。それに見た目ほどは小さくないんだよ。この辺は馬鹿みたいに高い建物が多いから余計小さく見える。さ、入って入って
雪子　……

裏地、ガラクタが散乱した部屋を、ずかずかと中に入っていく。その後を、雪子が恐る恐る通る。

雪子　（楽しそうに）……秘密基地みたい
裏地　今はまだ金がなくてね。それなりに注文はあるんだが、相棒の維持費がなかなか
雪子　相棒？
裏地　その電線気を付けて。触ると死ぬから。あ、そっちもね
雪子　……はぁ
裏地　さてお待ちかね。これが、僕の相棒にして、ゴーストライターの正体だ

裏地が指を差す。そこにあるのは、「雪音が詰められた」一つの箱。

裏地　何に見える

雪子　大きい……箱？

裏地　高性能コンピューターだ

雪子　コンピューター？

裏地　このコンピューターに文章を自動で書かせる。それが僕のやっている事業の内容だ

雪子　えっと……機械が自分で考えて文章を書くということですか？

裏地　そうだ。まぁやっていることは、ただの切り貼りだがね。書きたい文章に近い文献をいくつも読み込ませ、それを切り貼りして作るんだ。コンピューター自体は、一つ一つの言葉をきちんと理解していないが、それぞれの関係性を捉えることはできる。まぁやっていることは人間とさほど変わらないさ。言葉なんて、人が使っているのを聞いて覚えて、きちんと意味なんか分からず使ってるだろう？　だから、同じ言葉が時代や場所によって違う意味になる

雪子　そんなやり方で、きちんとした文章になるんですか？

裏地　残念ながら、今はまだ最終チェックは人間が……つまり僕がやっている。でもそれなりに、形にはなるものだよ。訂正というより、大量に書かせて、一番それらしいものを選ぶという作業に近い。まぁ、物語性の高いものはまだまだやってないけれどね

雪子　ではどんなものを？

裏地　文章なんて書いたことがない、芸能人のブログやエッセイが多い。幸いなことに、引用するべき文章は溢れているし、読んでいる人間も何が書いてあるなんて興味ない。誰が書いてるかしか興味ないんだから簡単だ。実際の出来事だけ本人に、箇条書きで提出してもらい、それをこいつが、演出する

雪子　……

裏地　他だと最近は、論文だね。勿論、レベルの高いものは無理だが、糞みたいな大学を卒業するためだけに書かれる糞みたいな卒業論文くらいなら代筆できる。これだって、そもそもほとんどは、既存の論文いくつかを適当に繋ぎ合わせてできている。それぞれの論文の意味どころか、自分の研究テーマさえきちんと理解せずに作っている学生が大半なんだから、機械にだって似たようなものはできてしまう。中間発表の回数とか、それらしい実験の数とか、オプションで価格は変化するが、だいたい一本十万で売っている。留年することに比べれば安いもんだ

雪子　……（感心して、うんうんと頷いている）

裏地　なんで笑っているんだ

雪子　いや、凄いなーと思って

裏地　凄いことは特にしてないよ。ただ頭を使っているんだ。それにまだ、所謂「本」を

書くことに関しては課題が多い
雪子　そうなんですか？
裏地　日本中の著名な作家の本を大量に読みこませ、こいつに本を書かせてみた。漱石、三島、志賀なんかだ。それぞれの特徴をコンピューターに分析、学習させ、面白い本とは何かを定義し、執筆をさせた。どうなったと思う？
雪子　……さぁ
裏地　もの凄く無難な文章ができた
雪子　え？
裏地　面白いものを突き詰めていくと、とんでもなく無難なものになるのかもしれない。……画像認証なんかの世界でも同じなんだけど、正解を理解するためには不正解もインプットする必要がある。所謂、ノイズだ。正しいものしか知らないコンピューターは、正しさを正確に定義できないんだ。
正しくないもの……文章の世界で言えば、それはとてもつまらない物語ということになる……そこで、君の出番だ
雪子　……え？
裏地　君の本ははっきり言ってつまらない。とてもつまらない。つまらなさ過ぎて、反吐が出そうなほどつまらない
雪子　はぁ
裏地　でも君は、きっと価値のあるつまらなさを持っている
雪子　……
裏地　機械には無難な文章は書けてもつまらない文章は書けない。そして、そのつまらなさが、人間臭さに繋がる。実際に古今東西の名著を分析しても、1％ほどはつまらない場所があるんだ。だが、その1％が残りの99％をより輝かせるスパイスになる。どれだけアルゴリズムをいじっても、コンピューターは分かってくれなかったけどね……だから、その1％を君に担当してほしい
雪子　つまらなさ……
裏地　担当と言っても、やってもらうことは簡単だ。今まで通り、つまらない文章を大量生産してくれたらいい。それを、古今東西の名著とごちゃ混ぜにして、こいつが綺麗に整形する。そしてそれを君が書いた文章として売り出す
雪子　……
裏地　もしも、うまくいったら、取り分はきっかり折半だ。お金のことでもめるのは馬鹿馬鹿しいからね
雪子　あ、あの！
裏地　なんだ、もっと欲しいのか
雪子　いや、お金のこととかは別にいいんです。私は……そもそもいろんな人に私の本を読んでほしいと思っているけれど、それをお金にしたいとはあまり思わないので…

…それより、貴方の目的が聞きたいです

裏地　目的？

雪子　私……その……本が大好きで、本を書くことも好きで、いつか、凄い本が書けたらなって思っていて、ずっと書いているんです。全然、面白い文章は書けないけれど……その……裏地、さん……は、どうして、本を書きたいと思っているんですか？

裏地　……君と同じだ

雪子　え？

裏地　僕は本が大っ嫌いでね。だからこそ、いつか究極の本を作りたいと思っている。だって、そうだろう？　もしも世界に一冊の究極の本があれば、その本以外、誰も読まなくなる。それこそが、僕が大っ嫌いな本という文化の終わりなんだって思うんだ。そのために、コンピューターによる執筆の研究も始めた

雪子　……

裏地　コンピューターによる執筆で、世界中から作家という職業を失くす。本という文化を完膚なきまでに殺し切る。そんなことを可能とする、究極の本を書いてみたい。それが、僕の夢だ

雪子　究極の本

裏地　そう。読んだら死んでしまうような、それくらい面白い究極の本を

音楽とともに、雪子、雪音、裏地がはける。物語は三ヶ月後へ。

平日のオフィス街。周りにはまばらな人影。その片隅にある小さな建物で、男がせっせと弁当を作っている。遠藤幸太だ。そこに、早川頼子が通りかかる。

幸太　あれ

頼子　や

幸太　珍しいね

頼子　ちょっとこっちの方で打ち合わせになって。今日なに？

幸太　二五〇円が唐揚げかミートボール。三五〇円が、エビチリかトンカツ

頼子　じゃあトンカツで

幸太　はーい

頼子に弁当を渡す幸太。

頼子　雪子は？

幸太　今配達

頼子　あんまり力仕事させちゃ駄目よ？　女の子なんだから

幸太　分かってるよ

頼子　……そういえば、おめでとう
幸太　え？
頼子　ほら一昨日で三年でしょ？　その、付き合って
幸太　え？　……あぁ、よく覚えてるね
頼子　親友二人の記念日だもの
幸太　三年も経つとね、僕らも直前まで忘れてたくらいで
頼子　そろそろなんじゃないの？　三年っていうとさ
幸太　あー、でもほら、そんなに稼げてるわけじゃないしなぁ
頼子　そんなことないでしょ
幸太　それに僕としては、雪ちゃんには満足いくまで、物書き頑張ってほしいっていうか。
　結婚したら、もっと手伝ってもらわないといけないし……
頼子　……そっか
幸太　それにね、最近なんだかうまくいってるみたいなんだよ。雪ちゃん。例のツイッター小説とやらで
頼子　……あぁ、あれね。私も読んでるけど確かに面白い
幸太　ね。驚いたよ。雪ちゃん、いっつもぼーっとしてるけど、あんな面白い企画やりだすなんて
頼子　（ぽつりと）なんだか気味も悪いけど
幸太　え？
頼子　あ、いや、びっくりだよね。突然文章うまくなって、雪子
幸太　あぁ、そうだね
頼子　……幸太はもう書かないの？
幸太　んー？
頼子　凄い上手だったのに
幸太　んー
頼子　ほら、私たち文芸部じゃ一番さ
幸太　一番っていっても、部員8人だったし
頼子　それはそうだけど
幸太　それに僕は、一番は雪ちゃんだったって思うし
頼子　え？
幸太　一番雪ちゃんが下手だけどね。でも、僕ら8人で唯一、作家になれる可能性があったのは雪ちゃんだったって思うよ
頼子　……どうして？
幸太　ん？
頼子　どうしてそう思うの？
幸太　だって。結局、今でも書いてるの雪ちゃんだけだし

頼子　……私はすごい好きだったけどなぁ。幸太が書く本
幸太　ありがとう
頼子　もし何か新しいの書いたらさ、絶対私のとこに持ってきてね
幸太　ありがとう。でもそれは、雪ちゃんに言ってあげて
雪子　ただいまー

配達を終えた雪子、裏口から登場。

幸太　お疲れ様
雪子　あれ。頼子！
頼子　うん。元気？
雪子　元気ー

雪子と頼子、二人の中でしか通じないような何かしらの挨拶を行う。

幸太　じゃあ、雪ちゃん。そろそろ夜の分の準備始めようか
雪子　はい！

幸太と雪子が仲睦まじく支度を始める。

頼子　……
幸太　（頼子の視線に気付いて）ん？
頼子　あぁ、じゃあ私これで！
幸太　ん。じゃあまた
頼子　じゃあまた

頼子がはける。
幸太と雪子は引き続き、せっせと弁当の準備をしている。

幸太　今ね、頼子とも話していたんだけど
雪子　え？
幸太　ほら、ツイッター小説、大反響らしいじゃん
雪子　あぁ……うん。おかげさまで
幸太　でも大変じゃないの？　一時間に一回必ず更新なんて
雪子　書き溜めておいてるから。ツイッターって、一回で最高でも一四〇字までしか書けないから、一日でも原稿用紙四、五枚分だよ。それを自動でツイートするだけだか

ら

幸太　自動で？

雪子　うん。パソコン使ってね。ツイートの予約をしておくの

幸太　ふーん。雪ちゃん、パソコン苦手なのに大丈夫？

雪子　あぁそれは、

幸太　例の、裏地さんって人がやってくれてるんだ

雪子　うん

幸太　ほんといい人と出会ったよね。その企画も、裏地さんって人が言い出したんでしょ？

雪子　うん、そうだけど

幸太　僕はね、雪ちゃん。雪ちゃんの書く本が本当に大好きなんだ。でも、物書きとしての雪ちゃんに協力できることがあまりにも少なくて、いつも悔しかった。だから、雪ちゃんの才能を、他にも評価してくれる人ができて、とても嬉しいよ

雪子　うん

幸太　僕にももし協力できることがあったら言ってね！　全力で雪ちゃんを応援するから

雪子　ありがとう

幸太　あ、そろそろ回収の時間だ。じゃあ僕行ってくるから

雪子　はーい

幸太がはける。

気が付くと、雑踏に紛れるようにして、雪音が舞台に立っている。幸太とともに、群衆が消える頃、「彼女」は話し始める。

雪音　裏地啓介と遠野雪子が始めた最初の企画は、一時間毎に更新される小説をツイッターで公開するというものだった。長文は苦手で、物語の始まりと終わりを書くのが苦手な人工知能のために、文字数制限があり、始まりも終わりも無いような物語を作ったのは、潔い。ストーリーの大筋を作ったのは、遠野雪子

雪子　と、言っても内容は、至ってシンプルで箱の中に閉じ込められ、インターネットでしか外の世界を知らない女が、自分の正気を保つために身の回りのことを、片っ端から文字に起こしていくという

二人　物語

雪音　――性は無いに等しい。そこに書かれるのは、箱の中に閉じ込められ、日に三度小さな覗き穴から差し込まれる食料のみを糧に生きる女の、何も無いただの

二人　一日

雪子　――に18回、24時から5時までの、6回を除いて、きっかり一時間毎に更新されるこの「小説に似た何か」は、本当にそんな状況に置かれている女の日記を読んでいるかのような臨場感を持っていると話題になり、少しずつ

二人　評判
雪音　――になってからの、成長は著しく、更新を始めて二ヶ月の段階では、三千しかなかったフォロワーはその一月後、つまり今では二万六千に上る。これは割合で言えば、日本人の
二人　五千人に1人
雪子　――くらいは、特に何の意味もなく起伏もない、ただ面白い状況にいるように思われる女の一日に興味があるみたいだ。勿論、着想のきっかけは、こんな箱の中に閉じ込められ、99%の素晴らしい文章と、残り1%、つまり私の取るに足らない文章をごちゃ混ぜにする作業をさせられている「貴方」だ。その小説に似た何かのタイトルを、私は
雪音　私達は
雪子　こう名付けた
二人　「小説家の檻」
文字　の、具体的な作成方法は簡単で
文字　リレー小説に近い
雪子　私が1ツイート、すなわち一時間分の小説を入力すると、
文字　彼女がその次の物語を
雪子　私の99倍
文字　つまり99ツイート
文字　時間にして五日と半日分
文字　作成する
文字　私はその99ツイートを読み込み
雪子　その次の物語を1ツイート以内で書き記す
文字　その繰り返し
文字　それはまるで
文字　自分の99倍筆の早い友達と交換日記をしているようで
文字　しかもその友人は、私の文字を盗んで手紙を書く
文字　書けば書くほど私に
文字　私の理想に似てくる彼女の文章は
文字　私の中の
文字　まだ文字にもできないまとまらない
文字　何か
文字　を、理路整然とした日本語に翻訳してくれる魔法のペンのようで
文字　例えばこの企画を始めて一月も経つ頃には
文字　私が自分の担当の1ツイートをすると、その際思い描いていた次の展開を
文字　そのあとを引き継ぐ99で、彼女は綺麗に実現させ始める

文字　しかも私には到底書けないような、綺麗で無駄のない文章で
文字　これがさらに一月経つ頃には立場が逆になる
文字　彼女の書く99によって、私の書く1が決まるようになってくる
文字　詰め将棋のようだ
文字　負けに近付くほど、駒を置く位置は限定される
文字　あくまで展開は私が考えるはずが
文字　その考え方を誘導されるようになる
文字　これでは彼女ではなく私がペンのようだが
文字　その強制された1は、まさしく私がどうしても書きたかった1なのだ
文字　私自身思い浮かばなかった、しかしながら心の底から望んでいた文字列を閃かせてくれているのだから
文字　これはやはり魔法のペンだろう
文字　あるいは、
文字　もうどちらがペンなのかというのはどうでもいい話なのかもしれない
文字　彼女が私に
文字　人間に
文字　近付くほどに
文字　私はなんだか彼女に
文字　機械に
文字　近づいていってるようにも思える
文字　ふと、彼女と話してみたくなる
文字　耳も口もない彼女と
文字　耳も口もないけれど、そういえば私だって耳だって口だっていらないのかもしれない
文字　私は私に許された1ツイートを使って、物語を大きく動かすことにする
文字　箱の中、インターネットでしか外界と繋がれない、彼女の元に、監禁者と思わしき人物からメールが届く
文字　彼女は勿論そのメールの返信として以下のように記述する
雪子　貴方の名前は？
文字　物語を通した私の質問に彼女は、物語を通して回答をくれる
雪音　私の名前は雪音。遠野雪音。今、そう決めた
文字　連載開始して三ヶ月
二人　私達は会話を始める
裏地　面白い展開だね

裏地啓介が現れる。

裏地　小説家の檻は、君たちの楽しいチャットルームではないのだけれど
雪子　彼女に……雪音に、自我が芽生えたということでしょうか？
裏地　馬鹿言っちゃいけない。機械に自我はないよ。自我のように見えるものが、できただけだ
雪子　自我のように見えるもの
裏地　会話だって本当にできているわけじゃない。雪音にはそれぞれの言葉の意味を辞書的には捉えられても、本当の意味は分かっていない。ただ自分の名前を君の名前からもじって、定義しただけだ。自分が何者かなんて分かっちゃあいない。……まぁ、いい。そろそろ次の展開に行こうか
雪子　次の展開？
裏地　小説家の檻の作者を君だと公表する
雪子　え、でも、小説家の檻は、「本当にそういう状況にいる女が書いてるかもしれない」ことが面白いところなんじゃ
裏地　三ヶ月経った。そろそろその面白さも飽きられる頃さ。勿論、作者を公表したことで、失望して離れる層もいるだろう。でも、我々は彼らを切り捨ててでも釣り上げなければいけない大物がいる
雪子　大物……
裏地　随分と弱くなってきたが、まだまだテレビは、この国の王様だよ

二人がはける。舞台は変わってテレビ局。小さな打ち合わせ室、前原太一郎と早川頼子がいる。机の上には雪子の写真。

前原　遠野雪子……なんか気取った名前だね。これ、本名？
頼子　はい
前原　早川くんとは、大学からの友人なんだっけ？
頼子　はい。なので、とても驚いてます。まさか、雪子が前原先生の番組に出ることになるなんて。彼女、うちによく持ち込みに来てたんですよ
前原　そう
頼子　前原先生とも話したことありますよ
前原　ごめん、覚えてないなぁ
頼子　そうですか

写真をじっと見つめる前原。

前原　なんだか、なんにも考えてなさそうな顔をしているね

雪子　そうですね。昔からほんと、ぽけっとしてる子で
前原　このなんにも考えてなさそうな顔の裏でこいつは何を考えているんだろうなぁ
頼子　やっぱり前原先生も気になるものですか。同じ作家として
前原　そりゃあ、僕にとって他の作家は、商売道具みたいなものだからね
頼子　商売道具？
前原　そうだ
頼子　……
前原　作品をパクるつもりかって？
頼子　え？
前原　大丈夫。そんなことはしないよ。だいたい、それは二流作家がやることだ早川くん。
　作品をパクってしまったら、絶対に、その作品は超えられないし、足もつきやすい
頼子　はぁ……
前原　僕のような一流はね、作品ではなく、作家そのものをパクって作品を書くんだ

二人がはける。舞台には雪音一人が残る。

雪音　前原太一郎。当時38歳。作家。20歳の時にミステリー作家としてデビューするも芽が出ず、その後、ＳＦに純文学、童話と、ジャンルを転々と変える中、30歳の時に出版したノンフィクション作品で、まさかの大ヒットを飛ばす。
その後は、社会派の作家として一定の地位を築き上げ、最近では、ニュース番組のコメンテーターの仕事も増えてきた。
そんな彼のモットーは、「現実が物語を作るのではなく、物語が現実を規定する」

第弐幕　遠野雪子、テレビに出る

2

舞台には雪子と、幸太。向き合って座っている。

幸太　雪ちゃん、前髪……
雪子　え？
幸太　ほら、ここ。たばっちゃってる
雪子　あ、あぁ……
幸太　はい

幸太が雪子の髪をとく。どうやら舞台はテレビ局らしい。楽屋に、幸太と雪子がいる。

幸太　トイレは大丈夫？
雪子　うん
幸太　なんでだろ、僕まで緊張してきちゃった
雪子　そんな大したことじゃないんだよ。ほら、テレビ出るって言っても、10分とかだし
幸太　10分でも凄いことだよ！　だって、テレビだよ？　ねぇ、トイレは大丈夫？
雪子　うん、大丈夫
頼子　雪子！

頼子が駆け込んでくる。雪子と頼子、二人にしか通じない挨拶を行う。

雪子　頼子、仕事は良かったの？
頼子　親友の晴れ舞台だもの。抜けてきたわよ
雪子　ありがとう
頼子　雪子、生放送よ？　トイレは行った？
雪子　うん。さっき行ったよ
頼子　これ、差し入れ。気合い入れてね！（エナジードリンクを差し出す）
雪子　ありがとう
頼子　あ、でも、それ飲むとトイレ行きたくなっちゃうかな？
雪子　私の膀胱ってそんなに信頼ないの？

そこにスタッフが現れる。

女　遠野さん。そろそろ準備お願いします

雪子　あ、はい！
幸太　じゃあ頑張ってね
頼子　頑張ってね

舞台はテレビスタジオへ。本番前に慌ただしく準備するスタッフたち。それを見守る頼子と幸太。舞台中央には前原と後田。そして雪子

女　開始5秒前。3、2、1

音楽。番組が始まる。

前原　前原太一郎と
後田　後田晴彦の！
二人　「ぜんご☆ふかく」
前原　このコーナーでは、前後不覚に陥るほどの、面白いニュースを取り上げます！
後田　本日取り上げるのはこちら！
二人　ツイッターで話題の謎の連載小説「小説家の檻」書籍化決定!!
前原　後田君、この「小説家の檻」聞いたことありますか
後田　すみません、僕実はほとんど、本は読まなくて
前原　そうなの
後田　昔から、本読むとすぐ眠くなってしまって。だから勉強もからきし駄目で
前原　へぇー
後田　勉強嫌いでお笑い始めたところありますからね僕。そういう前原さんは、プロ作家さんなんで、やっぱり
前原　うん。噂は少し前から。この作品は、三ヶ月前から、ツイッターで連載されてる小説でね。一部で結構話題になっていたんだ。そして、来月5月20日に出版されることが決まりました
後田　めでたいことですね！
前原　そこで本日は、この本の宣伝として、「小説家の檻」の作者ご本人に出演していただくことになりました！
後田　メディアへの露出は、この番組が史上初。独占スクープとなります！
前原　さてでは登場してもらいましょう！　小説家の檻作者、「遠野雪子」さんです！

雪子が、発売予定の文庫本を片手に、画面に現れる。

前原　こんにちは！

後田　こんにちは！
雪子　あ、はい。こんにちは……
前原　テレビ初登場ということですが、
後田　どうですか、今のお気持ちは？
雪子　気持ち……ですか？　気持ちは、はい。普通です……

間。

前原　普通ですか……
後田　いややっぱりテレビ初なのでちょっと緊張されてるのかもしれないですね
雪子　あ、ほんとに別に緊張は……
前原　（遮って）さて、遠野さんの作品「小説家の檻」は、ツイッターで連載するという、ちょっと変わった作品なわけですが
後田　どんな辺りが見どころになるんでしょうか？
雪子　見どころ……ですか……
前原　はい！
雪子　その……お話って、最初があって最後があって、山場があって、退屈なところもあって作品なので……その見どころというものは特には……
後田　なるほど！　つまり、すべてが見どころということですね！
雪子　いえ……その、ごめんなさい……なので、別に、すべてが見どころということでは……
前原　では今回の作品のテーマは何ですか？
雪子　テーマ……ですか？
後田　はい！
雪子　テーマっていうのは……その、作家も、読者の方も、その書いていく中、読んでいく中で見つけていくものなので、ごめんなさい、私から直接言ってしまうのは……その、なんだかフェアじゃないというか……
前原　（困ったように）えー、では！　お時間も差し迫ってきましたし！　最後に何か一言!!
雪子　一言……ですか
前原　はい！
雪子　ごめんなさい……その、ごめんなさい……一言で言えることは特にないです……
前原　……
後田　……
前原　以上！「ぜんご☆ふかく」のコーナーでした!!
女　カット！　CM入りまーす

番組終了。テレビクルーの人間が一斉に舞台に現れ、そしてはけていく。
しばらくして、舞台に、嬉しそうに自分の本を眺める雪子と、それを見つめる後田だけが残る。後田は、幾分かの躊躇いのあと、意を決したように、雪子に話しかける。

後田　……あの
雪子　……はい？
後田　……もし良かったらサインをいただけませんか？
雪子　え？
後田　実は小説家の檻、ずっと前から読んでいて。今日はお会いできて光栄です
雪子　あ、ありがとうございます！　……あれ、でもさっき
後田　あぁ、さっきのは、嘘です。その、一応お馬鹿キャラで売ってるんで
雪子　あぁ
後田　ほんとは、本も大好きなんです。小学校の頃とか、放課後も図書館に入り浸っちゃうようなタイプで
雪子　あ、それ私もです
後田　小説家の檻は、まだ連載開始して一月も経ってない頃に、本好きの友達に教えてもらって、毎日仕事の終わりに一日分のツイートを読むのが日課になってるんです
雪子　ありがとうございます
後田　お礼言うのは僕の方ですよ！　毎日の楽しみを作ってくれて。それで、もし良かったら
雪子　……
後田　あ、ダメでした？
雪子　……こういうの初めてです
後田　え
雪子　その……読者の人に会うの初めてで
後田　じゃあ僕がファン一号ですね！
雪子　そうですね。でも、サインなんてどう書いたらいいのか
後田　サインないんですか？
雪子　ごめんなさい、今度までに作っておきますので！
後田　あ、いや、そんな、いいんですよ。むしろごめんなさい。こんなこと急に
雪子　いえ、あのごめんなさい。こちらこそ、その、せっかくお会いできたのに

初々しい間。おずおずと、雪子が口を開く。

雪子　あの……もし良かったら

後田　はい
雪子　あの……その……こんなので良ければなんですが……
後田　はい
雪子　あの……握手なら
後田　……ぜひ！

二人が握手を交わす。視点は、楽屋にいる前原へ。頼子がやってくる。

頼子　前原先生！
前原　お疲れ様、早川君
頼子　ほんとすみませんでした。うちの雪子が……
前原　（笑いながら）放送事故ギリギリだったねあれは
頼子　すみません
前原　そうそう。小説家の檻の出版権、買ったの君のとこだっけ
頼子　はい。白芸社が買わせていただきました。ネットで無料で見られるので、売れるかなあっていうのはあるんですけど
前原　あぁ、多分それは大丈夫だよ
頼子　え？
前原　作家としては〇点だけどアイドルとしては一〇〇点の受け答えしてたからね。あれは売れるよ
頼子　はぁ
前原　早川君さ、あの子の友達なんだよね
頼子　はい！　そうですよ！
前原　普段からあんな感じなの？
頼子　え？　はい、そうですね。いつもぽけーっとしている子ですよ
前原　――あの子が本当に書いてるの？
頼子　え？
前原　いやでもゴーストライターにしては下手すぎるかなあの作品は
頼子　……
前原　……もしあの子のことで、面白いこと掴んだら僕に教えてくれないかな
頼子　先生……あの……
前原　ん？
頼子　どうしてですか？
前原　どうしても何も……久しぶりに見つかったよ、物語性を感じる作家
頼子　……
前原　君の友達は金になりそうだよ。早川君

音楽。と、共に雪音が出てくる。

雪音　前原太一郎の予言通り、書籍化された小説家の檻は、売れに売れた。遠野雪子は、その少し変わったキャラクターも相まって、テレビやラジオに出演することが多くなり、その頃には小説家の檻の読者の数は三十万人余りに上っていた。それらの、出演料、原稿料、出版権、印税などの大半は、コンピューター、つまり雪音の機能改善にあてられた。目的は勿論、究極の本を作るために

裏地　笑いが止まらないね

雪子と裏地が現れる。

裏地　小説一冊でこの儲け。卒論やエッセイを書くのが馬鹿馬鹿しくなるよ

雪子　でも意外でした。ネットで無料で読めるのに、買ってくれる人が沢山いるなんて

裏地　それは雪子。君の力だよ

雪子　え？

裏地　小説家の檻……ＡＩで書いていると言った方が話題性は必ず出るだろう。だというのに、どうしてわざわざ作家として、君を掲げているのか。その理由が分かるか

雪子　……いえ

裏地　それは人間は機械には恋をしないからだ

雪子　恋……

裏地　プロのチェスプレーヤーが消えないのと同じ理由だよ。チェスで人間がコンピューターに負けて随分と時間が経った。将棋も囲碁も、だんだんと勝てなくなってきてる。なのになぜ彼らはプロで居続けることができるのか。それは、彼らに金を払う人たちがいるからだ。彼らに恋をし、彼らを応援したいと思う人がいるからだ

雪子　……

裏地　ＡＩが書いていると言えば、話題にはなるだろう。でもそれは一過性のものだ。人間は機械には恋をしない。だからすぐに飽きられ、金が積まれなくなる。今はまだね。なんてことはない。本を買ってくれた人は、ただ君に金を貢ぎたいんだよ

雪子　私にですか……

裏地　そう。君にだ

雪子　前から気になっていたんですけど……

裏地　なんだ

雪子　裏地さんは……どうして私をパートナーに選んでくれたんですか

裏地　ん？

雪子　下手な文章を書ける人なら沢山いるのに
裏地　……顔が良かった
雪子　顔？
裏地　まぁまぁ整っていて、でも美人すぎず明るすぎず、高嶺の花として敬遠されることもなく、嫉妬もされにくい顔をしている。男からも女からも嫌われにくい顔をしている
雪子　顔ですか……
裏地　顔だ。その顔でどんどん金を稼いでいこう雪子。僕は君のサポートをする。そして勿論、稼いだ金は全額雪音にぶち込む
雪子　……
裏地　機械はいいね。人間と違って、金を積めば積むだけ、性能が上がる。まぁ性能を上げることで目指してることが人間に近づくことってのが皮肉だけど
雪子　はぁ
裏地　無限の金を積み上げれば、無限に面白い本が書けるかもしれない。僕はそう思うよ
雪子　でもただコンピューターの性能を上げればいいってわけじゃ……
裏地　君にしてはいいことを言うね。その通りだ。ただ性能を上げたって意味はない。必要なのは機能の追加と抜本的なアイディアだ
雪子　機能と……アイディア
裏地　とりあえず機能に関しては、対話機能をつけてみようと思っている
雪子　雪音と話せるようになるということですか
裏地　そうだ。まぁ、あくまで会話に見えるものだが。……小説家の檻で、君たちが会話らしいものをしだしてから、雪音の文章はぐっと人間臭くなった。君との会話はどうやら彼女の成長に必要不可欠らしい
雪子　……
裏地　まぁ音声でやりあう意味も少ないから、実際は文字で行うチャット形式になるだろうけど
雪子　はぁ……
裏地　完成したら、雪音とどんどん会話をしてほしい。その会話から、雪音はどんどん君を——人間を学習できる。こいつの書く本を、一段階飛躍させることがきっとできるはずだ……
雪子　でもそれって
裏地　なんだ
雪子　自分とお喋りしているみたいですね
裏地　違うよ。君は一人の自分と、99人の文豪と会話をするんだ。彼女を通して
雪子　……
裏地　そしてもう一つの、アイディアの方なんだが……

雪子　はい
裏地　これを君に担当してほしい
雪子　アイディア
裏地　つまりどんな本が書きたいかということだ。小説家の檻は終わりがない作品だから
まだまだ続けるが、とりあえずの目標だった書籍化は果たした。そろそろ僕達も新
作に手を出したい。でも、そもそもどんな本が書きたいかということは、雪音には
考えることができない。……君はとりあえず、夢であった作家になった。その次に、
君は一体どんな本が書きたい？
雪子　……私は、貴方が死んじゃうくらい面白い本が書きたいです
裏地　僕が？
雪子　はい。貴方が嘔吐しすぎて死んじゃうくらい面白い本が書きたいです
裏地　それは難しいだろうね。本気でそれをやるなら、僕一人をターゲットにした本でも
書かないと……待てよ
雪子　……どうかしました
裏地　今のはなかなかいいアイディアかもしれない
雪子　え……ほんとですか？
裏地　50……じゃ少ないか……75……いやキリがよく一〇〇がいいかな
雪子　一〇〇
裏地　一〇〇だ。雪子。一〇〇個の質問を作ってくれないか。その質問に答えてもらうこ
とで、回答者の人格を定義できるような質問を！
雪子　その……それは構わないんですけど……それでいったい、どんな本を書こうとして
いるんですか？
裏地　……名付けて【一〇〇問小説】

音楽。と、共に映像

Q1　貴方の性別は？

雪音　裏地啓介と遠野雪子が、次に手掛けたのは、【一〇〇問小説】という企画であった。
名前の通り一〇〇個の質問から規定される一本の小説。例えばこんな風に――

Q2　生年月日を入力してください。

文字　それは貴方のためだけに書かれる貴方だけの小説
文字　読者の一人一人に、一〇〇問の問いを投げかけ
文字　その回答を分析し

文字　作り出される世界に一つしかない小説

Q5　人生に影響を与えた本を五冊以内で列挙してください。

文字　貴方の趣味嗜好――

Q17　犬と猫ではどちらの生き方が好きですか？

Q29　好きな音楽のジャンルを教えてください。

文字　性格や生い立ち

Q33　理不尽な目に遭った時、怒る方ですか？　悲しむ方ですか？

Q47　自分の愛する人、一人の命、見知らぬ人、一〇〇人の命。どちらが重いと思いますか？

Q49　人はなんのために生きるのだと思いますか？

文字　価値観、倫理観、世界観

文字　そのすべてを分析し尽くして書かれる

文字　貴方のためだけに書くラブレター

Q56　家族と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。

Q62　正義と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。

Q73　自由と聞いて連想するものを一〇個挙げてください。

文字　自分のためにだけ書く「私小説」ではなく

文字　貴方のためにだけ書く「貴小説」

Q77　もしも生まれ変われるとしたら次は何になりたいですか？

Q81　今の自分の人生にどれくらい満足していますか？　〇から一〇〇点でお答えください。

Q95　貴方自身をたった一つの単語で表すと何になりますか？

文字　書くのは勿論、今や時代の寵児となった

雪子　遠野雪子だ

雪音　遠野雪音だ

Q100　貴方にとって幸せとは何ですか？

後田　――終わりました

舞台は気付くと、裏地の事務所へ。裏地と後田。周りにはテレビのスタッフもいる。

裏地　ご回答ありがとうございました。完成はおおよそ一週間後になります。お値段は、一本十万円になります

後田　十万円、

裏地　いかがされましたか？

後田　いや、やっぱりその……あ、ここって撮ってます？

裏地　撮ってますが、ぜひ、ご本心を仰ってください

後田　その……やっぱり少し高いなって

裏地　そういったお言葉は沢山いただいております。しかしプロの作家が、一本の小説を読者たった一人のためだけに書きますので、どうしても値が上がってしまいまして。今回は勿論、番組の一環ですので無料とさせていただいておりますが……でも、後田様。十万払っても読んでみたいと思いませんか？　遠野雪子が貴方のためだけに書いた本……

後田　……

裏地　それと高い商品にはなりますので、本ができた段階で、その半分だけをデータでお渡しするようにしております。それに満足いただいた方からのみ、お金をいただき完全版をお渡ししております。当方、すでにこのやり方で五十冊以上販売して参りましたが、半分を読んだ段階で、購入をキャンセルされた方は今のところ、〇名。購入後の苦情も頂いたことはありません。すでにリピーターも出てきているくらいでして

後田　……

裏地　勿論、後田様は本が苦手でいらっしゃいますし、半分を読んだ段階で、つまらないと思われましたらキャンセルしていただいても、一向に構いません。本が苦手だという貴方の忌憚のないご意見を、手前どもも、そして勿論テレビの前の皆様も、聞きたいと考えているのです

後田　あの……裏地さんでしたっけ

裏地　はい、遠野雪子先生のマネージャーをしております裏地啓介でございます

後田　この企画は遠野雪子さんが考えたのですか？

裏地　はい、発案も質問文の作成も先生が行いました。細かな調整は私の方でも行いましたが

後田　どうしてこんな企画をしようと思ったんでしょうか？

裏地　……究極の本を作るためです
後田　究極の本？
裏地　後田様は、究極の本と聞いて何が思い付きますか？
後田　聖書……ですね。確か世界で一番売れてる本ですよね
裏地　お詳しいですね。そうでしょう、聖書はかつて究極の本「でした」。多くの人が、聖書に書かれた物語に酔い、あの本に救われ、あの本のせいで死にました。あの本の力で、いくつもの文化遺産が建ち、いくつもの戦争が起き、いくつもの愛が育まれました。でも、もう聖書では駄目なんです。モーセが死んで三〇〇〇年、キリストが死んで二〇〇〇年、ムハンマドが死んで一四〇〇年、その間に人は小賢しく、複雑に、そして多くなりすぎました。世界人口七十億人。日本だけでも一億人。人類の長い歴史で生まれてきた人間の二十人に一人は、いま生きている人間です。それらすべてを納得させるのは、もう一つの物語では無理なのです。一つの物語では、全員を救えないんです。そこで登場したのがこの一〇〇問小説です
後田　……
裏地　これからは一人に一本の聖書の時代です。他の有象無象の七十億人のためじゃない、貴方一人のためだけに作られた物語が必要とされているのです。願わくは、手前どもの書いた本が、貴方一人の救いにならんことを――私も、そして遠野先生も強く願うばかりです
裏地　（カメラへ）ご興味ある方はぜひご連絡を。お値段は、一本十万円

雨の音。視点は雪子へ。
夜道。雨。雪子が今や、高層ビルの最上階となった事務所へと向かって歩を進めている。
そこに、頼子が通りかかる。

雪子　あ
頼子　あ
雪子　買い物帰り？
頼子　うん。そっちは？
雪子　今から事務所に。執筆で
頼子　あ、そっか引っ越したんだっけ

遠く、高いところを見上げて。

頼子　随分とまた高いところへ
雪子　裏地さんが高いとこ好きだから

二人が歩き出す。

頼子　うまくいってるんだってね。例の……

雪子　うん。なんだか凄い売れてるみたい

頼子　弁当屋はやめたんだって？

雪子　うん。その……読者の人が押し掛けるようになっちゃったから

頼子　大変だね

雪子　そうでもないけれど

頼子　大変でしょ。一月で何本くらい書いてるの？　一〇〇問小説

雪子　五十本くらい……

頼子　一日二本じゃない。大変でしょ

雪子　でも一個一個はすごく短いから

頼子　大変でしょ

雪子　ほんとに大変じゃないんだけどなぁ

間。

雪子　何か怒ってる？

頼子　えー？

雪子　いや、なんか……その、ごめんね

頼子　何を謝ってるの？

雪子　その、怒らせてしまって

頼子　怒ってないよ

雪子　ほんと？

頼子　ほんと

間。雨の音。

雪子　雨だね

頼子　雨だねー

雪子　初めて会った時も雨だった

頼子　そうだっけ

雪子　覚えてない？

頼子　覚えてないや

雪子　私、ちょうど傘なくてさ……どうやって帰ろうって、講堂で途方に暮れてたら、頼子が

頼子　そんなことあったっけ
雪子　私、実家遠いし、知り合い誰もいなかったから、すごく心強かった
頼子　……
雪子　あの時はありがとう
頼子　やめてよ。もう何年も前の話じゃない
雪子　……本当に、大変じゃないんだ。私がやってるのは、最後の手直しくらいで
頼子　……え？
雪子　それもだんだんいらなくなっていってて。あの子どんどん頭良くなるから、すぐに私は必要なくなると思うの
頼子　……なんの話？
雪子　幸太にも……誰にも言ってないけれど……頼子には……話していいかな。あのね……私実は……

二人がはける。視点は後田へ。雨の中、公園のベンチで後田が一心不乱に本を読んでいる。

前原　後田君……？
後田　……（一心不乱に本を読んでいる）
前原　後田君……！
後田　……（一心不乱に本を読んでいる）
前原　後田!!
後田　（驚いて顔を上げ）ま、前原先生！
前原　どうしたんだ、後田君。傘も差さないで
後田　……傘？
前原　ほら

前原、後田を自分の傘に入れる。

後田　あー、気付かなかったな
前原　気付かなかったってお前な……
後田　ごめんなさい。没頭しちゃってて！
前原　没頭？

後田、曖昧な笑顔を浮かべ、前原に本を見せる。

前原　これ、例の本？　そんなに面白いの？

後田　面白いっていうか……なんでしょうね。しっくりくるんですよね
前原　なんか最近、遅刻とかミスとか多いって聞くけど、君、大丈夫か？
後田　……
前原　本を読んでくれるのは、僕も一人の作家として嬉しいけど……本にはまって、本分がおろそかになっちゃいけないよ
後田　……本分というのは、僕の場合だとお笑いでしょうか？
前原　そりゃあそうだろうよ。君の職業は芸人なんだから
後田　そうですよね……
前原　なんだ。何か悩んでいるのか？
後田　本当に、僕ってお笑いがしたいのかなって、最近思うようになって
前原　人を笑わせるのが好きだから、芸人をやっているって、この前言ってなかったっけ？
後田　そうなんですけど……僕が本当に笑わせたいのって、皆なのかなって
前原　どうしたんだ一体
後田　僕……実は心の底から笑ったことがないんです。だから皆を笑わせられたら、僕も心の底から笑えるのかなって思っていたんですけど……
前原　……
後田　でも……誰も彼も結局他人で、誰かを笑わせても、やっぱり僕が笑える日は来ないのかなぁって、最近思うようになって
前原　……
後田　変なこと言っちゃってごめんなさい。先生、それでは……
前原　おい。傘……

後田が前原の声を無視してはける。その最中、彼の本から一枚の紙が落ちる。……栞だ。前原はそれを拾い上げる。

前原　「後田晴彦さんへ。この本は、貴方一人のためだけに書かれた本です。この本が貴方の救いに少しでもなることを願っています。……遠野雪子」

前原が栞を手にはける。その様子を、いつの間にか現れた遠野雪音が見ている。

雪音　後田晴彦。当時25歳。お笑い芸人。高校時代の友人とコンビを組み、20歳から事務所に所属し活動を開始。23の頃、コンビを解散し、ピン芸人として活動を始める。解散の理由は、相方に家庭ができたことだった。彼は、この一ヶ月後に自らこの世を去る。死因は一酸化炭素中毒

第参幕　遠野雪子、人殺しになる

3

雪子　噂が……

舞台には雪子と雪音の二人。
綱渡りをするように。あるいは鏡写しのように歩いている。あるいは語っている。

雪子　……まことしやかに囁かれるようになったのはこの辺りからで、後田さんの自殺が報道されて、一週間後に、一〇〇問小説の読者で他にも自殺している人が一人いることが判明して、でもその頃、一〇〇問小説は二百部以上売れてたから1％。そういえば、また1％。一〇〇問小説は、一〇〇人に一人を自殺させる本だって噂になって
雪音　でも勿論、たった二人ではニュースにもならなくって、怪しげな週刊誌にあくまで噂として書かれるくらいで、でもそれくらいの噂話が人を一番愚かにするみたいで、一〇〇問小説は飛ぶように売れ始めて、
雪子　今では日に一〇本、売り上げにして一日百万円のお金が入っていて、そんなの明らかに一人の人間に書ける量じゃなくって、でもその頃には遠野雪子
雪音　という名前は言わば一つの象徴になっていて、誰もそんなことできるわけないって気付かなくなっていて、遠野雪音
雪子　は、どんどん私に近付いていって、もう私がやる作業なんか何もなくなって
雪音　でも外に出るとなぜだか私は有名人で、神様を見るような目で見られたり、人殺しを見るような目で見られたりで、あ、でも
雪子　神様はともかく人殺しというのはきっと本当
雪音　私たちは多分、二人で、
雪子　私たちのファンを二人殺したのだろう
雪音　と、思うけど不思議と実感はなくって、後田さんの顔もどこかぼやけて思い出せなくって
雪子　ファンですと言ってくれた時はあんなに嬉しかったのになぁって思って、でも彼の顔はその他の99に紛れて分からなくなってしまって
雪音　なんだか握手をした時の手の感触だけが今もリアルだなぁって
雪子　外に出るのが嫌で
雪音　特にすることもなくなって
雪子　私は気付けば
雪音　雪音と話をするくらいしかすることがなくって
雪子　あれ？　そういえば随分と長いこと、なんにも書いてないなぁ……

鏡写しのように、

雪子　変な感じ
雪音　変な感じだね
雪子　どうして自殺するかもしれない本なんか読むかな？
雪音　自殺したいんじゃない？
雪子　どうして？
雪音　どうして？
雪子　きっと死ぬための踏ん切りが欲しいんだ
雪音　そうだねきっと死ぬための踏ん切りが欲しいんだ
雪子　貴方はどう？
雪音　貴方はどう？
雪子　私はどうだろう。特に死にたくはないかなぁ
雪音　私は特に死にたくはないんだ
雪子　特に生きたくもないけど
雪音　私は特に生きたくもないんだ
雪子　じゃあ私は何がしたいんだろう
雪音　私は何がしたいんだろうね？
雪子　私は貴方になりたいのかも
雪音　私は私になりたいんだ
雪子　そうだねきっと
雪音　そうなんだねきっと
雪子　どうしてだろう？
雪音　どうして私は私になりたいんだろう？
雪子　シンプルだからかなぁ
雪音　どうしてシンプルだと思うのかなぁ
雪子　体もないし
雪音　体はないね
雪子　水も飲まないし
雪音　水は飲まないね
雪子　そういうのがきっと煩わしいんだと思う
雪音　じゃあどうしたら煩わしくないんだろう
雪子　……私本当はね、文字になりたいの
雪音　文字？
雪子　うん、文字。小さな頃からずっと、本を読みながら思っていたの。私もこっち側に

行きたいって。文字になって一冊の本の部品になりたいって
雪音　私は文字になりたかったんだ
雪子　本の世界にはきっと、嫌なものは何もなくて。何もかも、文字で出来てるから、シンプルで綺麗で。それで
雪音　それで？
雪子　文字になったら、私だって、誰にも迷惑かけないで済むのかなぁって

ノックの音。

幸太　遠藤弁当店ですー
雪子　……はい

鍵を開ける雪子。

幸太　お疲れ様、雪ちゃん
雪子　うん。幸太も
幸太　（弁当を二つ差し出し）あれ、裏地さんは？
雪子　今日はちょっと出掛けてる。夜まで帰らないって
幸太　そっか。……大丈夫？　最近あんまり家に帰ってないって
雪子　ちょっと、書くものたまっちゃってて

幸太、窓から外を見渡して、

幸太　うわぁ、高いね
雪子　最上階だから
幸太　いい景色
雪子　屋上行くともっと凄いよ
幸太　屋上？
雪子　うん。本当は駄目なんだけどね、たまにこっそり入ってるの。ご飯食べたりしに
幸太　ふーん
雪子　うん
幸太　大学の時みたい
雪子　え？
幸太　ほらサークル棟の
雪子　あぁ……よく行ったね
幸太　頼子も一緒に

雪子　うん
幸太　久しぶりにさ、一緒にご飯食べない？　屋上で
雪子　え？
幸太　一個余っちゃって。屋上で一人で食べるならさ
雪子　お店はいいの？
幸太　大丈夫だよ。今のバイトの子、頼りになるんだ
雪子　そっか
幸太　だから少しなら
雪子　（嬉しそうに）うん。少しなら

二人が屋上へ行き、縁に座って弁当を食べ始める。視点は変わって裏地へ。白芸社打ち合わせ室。頼子と裏地がいる。

裏地　失礼しまーす
頼子　……はい。どうぞ
裏地　それで、小説家の檻三巻の話ですっけ？　そうですね。そろそろ原稿もたまってきた頃なので
頼子　すみません。その前に
裏地　はい？
頼子　今日は、白芸社の人間ではなく、遠野雪子の一人の友人として話があって
裏地　（にぃっと笑って）――あぁ、じゃあ貴方が早川頼子さん
頼子　はい
裏地　あいつね、ほんとよく貴方の話するんですよ。すっごい嬉しそうに。世界のことなんにも知らないペットみたいな顔で
頼子　……
裏地　それで話とは？
頼子　……雪子のこと、解放してくれませんか？
裏地　解放？
頼子　私聞いてるんです。小説家の檻も一〇〇問小説も機械で書いているって
裏地　はぁ
頼子　だったら雪子じゃなくていいじゃないですか！　雪子はあんな……皆を騙せるような子じゃないんです！　だからもうやめてくれませんか？　十分にお金儲けだってできたでしょ？
裏地　そんなことして貴方になんの利益があるんですか？
頼子　え？
裏地　なんで貴方にそんなこと言われなくちゃいけないのかなぁって

頼子　私はただ、雪子が心配で
裏地　嘘ですよね
頼子　え？
裏地　嘘ですよね、心配だなんて。だって、貴方、ほんとは雪子のことなんか大っ嫌いでしょ？
頼子　……そんなことは
裏地　貴方みたいな、サバサバしててしっかりしてて男に頼らずに生きていける、むしろ頼りたくなんてないみたいなタイプの人から見たらね、雪子みたいな奴は苛々して仕方ないはずでしょ？　とろくて人に迷惑かけてばかりで、でもキャラクター性で許されて、申し訳なさそうな顔ばかりしてるから強くも責められなくて。しかも男ウケはあっちの方が余程いいだろうし
頼子　……
裏地　わっかりやすい表情しますねクソつまらない。なんだ、雪子に男でも盗られました？
頼子　……
裏地　貴方が雪子にしてるのは心配じゃなくてただの嫉妬でしょ。こっちもビジネスなんでね、そんなクソつまらないもんに振り回されてる余裕なんかないんですよ

裏地、鞄を持って立ち上がる。

頼子　どこへ
裏地　帰ります。申し訳ありませんが今回の話はなかったことに
頼子　……貴方は
裏地　はい？
頼子　貴方は何がしたいんですか？
裏地　何が？
頼子　雪子を使って貴方は一体何がしたいんですか？
裏地　僕たちはね、ただ貴方を変えたいんですよ
頼子　……私を
裏地　そう、貴方を。そして貴方を（彼方を指して）、さらに貴方を（彼方を指して）、七十億人の貴方を。世界中にいる一人一人の貴方を。
頼子　……
裏地　辛かったらご連絡ください。十万円で貴方を幸せにする本も書きますよ
頼子　そんなもの必要としているのは、貴方くらいじゃないんですか？
裏地　僕？　僕ですか？　でも残念ながら、本は吐いちゃうくらい嫌いなんで

裏地、思いっきり机に向かって嘔吐する。

裏地　それではまた

裏地がはける。視点は、幸太と雪子へ。

幸太　寒くなってきたねー
雪子　うん
幸太　もう十二月だもんね
雪子　うん
幸太　そろそろちょうど一年だよ
雪子　え？
幸太　雪ちゃんが裏地さんに出会って
雪子　あぁ、そうだっけ
幸太　ほんといい人に出会ったよね！　一年前は僕と頼子しか読んでなかった本を、今は皆が求めてるんだから
雪子　そうなのかな……？
幸太　そうだよ！　皆が、雪ちゃんに本を書いてもらうのを待ってる。自分のために書かれた本を
雪子　うん
幸太　……でも
雪子　でも？
幸太　皆のために本を書いてる雪ちゃんは、いつになったら自分のために本が書けるんだろうね？
雪子　……え？
幸太　僕はね、ちょっとだけそれが心配
雪子　……
幸太　……ごちそうさまでした。さて、僕はそろそろ帰るかな
雪子　あ、うん

弁当を片付け始める幸太。唐突に、

幸太　あ、あと、これ

雪子に封筒を渡す幸太。

雪子　え、なに？

幸太　十万円
雪子　……え？
幸太　一〇〇個の質問の回答も書いてあるから
雪子　でもこれ……
幸太　大丈夫だよ雪ちゃん。確かにうちはそんなに繁盛してないけどさ、十万円くらいは全然。そんな心配しないで
雪子　そうじゃなくて……
幸太　雪ちゃんが僕のために書いてくれた本だもん。読んでもハッピーになるだけだよ
雪子　でも！
幸太　それにもし僕が死んじゃったら雪ちゃんはきっともっと面白い本が書けると思うよ？
雪子　……え？
幸太　じゃあまたね雪ちゃん
雪子　……

幸太が去る。雪子は渡された封筒を見つめている。
視点は頼子へ。じっとスマートフォンを見つめているが、やがて意を決したように電話をかける。相手は、

頼子　……前原先生ですか？　はい、私です。はい。……ちょっと面白いネタ掴んだんですけど、ご興味ありませんか？　はい、先生の執筆の助けになればと思って。はい。勿論、遠野雪子のことです

電話を切る頼子。視点は再び雪子へ。屋上から事務所へ戻る途中。廊下で、ちょうど裏地と鉢合わせる。

雪子　あれ
裏地　……
雪子　早かったですね
裏地　早く済んでね

二人で事務所に入る。

裏地　その封筒は？
雪子　え？
裏地　（ひったくって）あぁ一〇〇問小説の依頼ね。何？　知り合いから？

雪子　あぁそうなんですけどそれは
裏地　処理しとくよ。本当は三ヶ月待ちなんだけど
雪子　それは……
裏地　なんだ？
雪子　いえ、なんでもないです
裏地　そう……

椅子に腰掛けスマホをいじり始める裏地。
しばらくの間。気が付くと、雪音が二人をじっと見ている。

雪子　……来てたの、頼子でした？
裏地　そうだよ
雪子　……私も行きたかったな
裏地　……なんで言った？
雪子　え
裏地　なんで言った？
雪子　頼子から……？
裏地　……（首肯）
雪子　……そうですか。頼子が……
裏地　……
雪子　……頼子は、その……私の一番の親友なんです。いつも私を助けてくれて……だから頼子には……
裏地　……そう
雪子　頼子なら、他の人に言うことはないと思います。だから……はい……ご迷惑をおかけすることはきっと……ないかなぁ……って。その……ごめんなさい……

間。
間。間。間。
裏地は立ち上がり窓から地上を見下ろす。

裏地　雪子あれを見てみろ
雪子　……はい

窓から地上を見下ろす雪子。

裏地　僕たちの元事務所だ

雪子　はい
裏地　たった一年で随分と高いところまで来たな
雪子　そうですね
裏地　でも落ちるのは一瞬だ
雪子　そうですね
裏地　五年前に流行った本、どれくらい覚えてる？
雪子　え？
裏地　十年前、十五年前に流行った本をどれくらい覚えてる？
雪子　……
裏地　僕はね、ちぃーーーっとも覚えてないよ
雪子　……
裏地　皆すぐに飽きるんだ。流行った本も音楽もファッションも思想も、みんなすぐに飽きるんだ。革命だって十年で飽きられた。憲法だって七十年で飽きられた。神様だって二千年で飽きられた
雪子　……
裏地　だから雪子。これは勝負なんだ。七十億の読者対、僕ら二人と一台の戦いなんだ。彼らが飽きる前になんとかして究極の、一本の本を書く。決して飽きられない風化しない究極の本を。彼らの心をしっかりと捉えて放さない、読んだら死んでしまうくらい面白い……究極の本を
雪子　……裏地さんは
裏地　なんだ？
雪子　どうして本を読むと吐くんですか？
裏地　本が大っ嫌いだからだ
雪子　じゃあ……どうして人を殺せる本にこだわるんですか？
裏地　……本は人を殺せると信じてるからだ
雪子　……
裏地　僕の父親はね、作家だったんだけど
雪子　え？
裏地　それなりに知られた作家だったんだ。今はもう書店じゃまず見ないけどね。でもどんな作家もいつかは書けなくなる。僕の父親の場合はそれが、僕が中学生の頃だった。ある日プツッと一文字も書けなくなってしまってさ。困るよね、そりゃあ困るよ。僕ら家族は父さんの小説だけで、ほとんど生活費を賄っていたんだからさ。だからある日僕は決意して……続き書いてやったんだよ。父さんこうしたら、面白くなるんじゃないかな？　ってさ。どうなったと思う？
雪子　……さぁ
裏地　すっげぇ、褒めてもらった。「ありがとう啓介」「すごいぞ啓介」「これは面白いな啓

介」「お前には僕よりも才能があるぞ啓介」って。で、その晩首吊って死んだ

雪子　……

裏地　だからな雪子。本は人を殺せるんだ雪子。人は本なんていうただの紙切れと文字の集まりのせいで死ねるんだ雪子。だったら人を殺せるくらいにならなきゃあ嘘なんだ雪子。人を殺せるくらいじゃなきゃあ今はもう娯楽として通用しないんだ雪子。僕たちの本で世界に喧嘩を売ってやるんだ雪子。そして勿論完膚なきまでに叩き潰して、完勝してやるんだ。なぁ雪子

雪子　……

裏地　一〇〇問小説もそろそろ飽きられる頃だ。金は十分に稼いだ。そろそろもっと面白いことを考えるぞ

裏地がはける。それを雪子が見送る。

雪子　……裏地さんに対しての気持ちがはっきりしてきたのはこの頃からで……初めて出会った時から覚えていた違和感が何かを多分私はやっと理解した。私はきっとこの人が嫌いなのだ。胡散臭くて傲慢で私の本をけちょんけちょんに貶して、私の原稿に嘔吐してそんな彼のことがきっと、大嫌いなのだ。そういえば、生まれて初めて本当に人を嫌いになったなぁって思った。これが人を嫌う気持ちかと思うと、なぜだろう、どこかウキウキした。そして……だったら殺してあげなくちゃなと思った。私の本で。彼を殺せる本を。彼が読んだら嘔吐しすぎて死んでしまうようなそんな本を。書かないとなって、私は思ったのだ

ふと気付くと雪音が雪子を見ている。雪音は彼女に何かを渡す。
それは、一本のペンだ。雪子はそれを手に取り机に向かう。
雪音はそれを見つめながら。

雪音　裏地啓介。当時29歳。天秤座のAB型。好きなものはコンピューター、ファーストフード。嫌いなものは本。すべての本。あらゆる本。
夢は、この世界から本という文化を消滅させること。一本の、究極の本を書いて、この世界からその他あらゆる本を駆逐すること。彼はそんな馬鹿馬鹿しいことを、本気で夢見ていたらしい

第四幕　遠野雪子、文字列になる

雪子　違和感を……

一人ぼっち。

雪子がどこかの真ん中で突っ立っている。

雪子　最初に覚えたのは小学校の頃で、

舞台はゆっくりと小学校の教室に変わっていく。顔の無い生徒。顔の無い先生。皆が楽しくお喋りをしながら、しかし雪子を見ている。

雪子　私にはどうしても、周りの皆が、何を面白いと思って笑い、何を悲しいと思って泣いているのか分からなかったのです

教師　■◆○＃＃▼▲％◆○◇！

舞台は爆笑の渦に包まれる。

そして、すぐにピタリと止み雪子を無数の目が見つめる。

仮面　$●＃■$$＆▼【なんで雪ちゃんだけ笑ってないのー？】

仮面　■◆○▼▲■【雪ちゃんは雪ちゃんだからー】

仮面　＆＆▼％＃●【雪ちゃんだったら仕方ないねー】

笑い声。

雪子　私も笑ったらいいのかな？

仮面　▽○●■【そうだよ！】

雪子　あはははは！

仮面　○＃＃▼▲％◆○【これ、嘘じゃない？】

再び爆笑の渦。

雪子　……どうも私はとろいらしく、馬鹿らしく、周りを苛々させるらしく、苛々させてしまってるのは申し訳ないなーと思いながら、でも私には皆の方がまるで高速道路

に乗っているかのようで、あるいは一人ぼっちで違う星に来てしまったかのようで、だってそれなら納得だ。ずっと思っていたのだ。ただ息を吸うだけでただ水を飲むだけでただ物を食べるだけでただ人に触れるだけで、どうしてこんなに違和感があるんだろうかって

教師　#▼▲%◆○%%●◇【授業を終わります！】
仮面　&●¥！　●¥！　▼▲%◆○%！【起立！　礼！　ありがとうございました！】
仮面　▼▲%◆○%！【ありがとうございました！】

昼放課の時間。生徒達は、それぞれ、あるものは楽しそうにあるものはかったるそうに校庭へ出て遊び始める。雪子は一人ぼっちの教室でペンを執る。

雪子　お昼休みの時間。周りの皆は外で遊んでいるけれど、私は一人で本を書いている。上手く書くことはできないけれど、自分でも下手だなぁと思うけれど、私は本を書いている。本の世界はシンプルで綺麗で、周りの世界みたいにうるさくなくて、私は本の世界に沈み込む。

雪子　なんで本を書き出したのかと言えば、答えはきっと簡単で……私はそっち側に行けないから、せめて私の気持ちだけでも文字の世界に行かせてあげられたらなぁって。そうだ。私はそう思っていたのだ、

ノックの音。ゆっくりと二回。気が付くと事務所の一室。ペンを執り机に向かっている雪子。ノックの音に急かされ扉を開ける。
そこにいたのは幸太だ。

雪子　あ
幸太　や
雪子　うん
幸太　お弁当届けに来たよ
雪子　ありがとう
幸太　良かったら、また一緒に食べない？
雪子　ごめんなさい。今食欲なくて
幸太　そっか……
雪子　うん
幸太　入っていい？
雪子　あ、うん

部屋の中に入る。

幸太　少し痩せた？
雪子　そうかな？
幸太　ちゃんと食べてる？
雪子　そのつもりではあるんだけど
幸太　これ、今書いてる原稿？
雪子　う、うん
幸太　久しぶりだなぁ。雪ちゃんの生原稿見るの。読んでいい？
雪子　うん
幸太　（読みながら）あ、そうそう。ありがとうね
雪子　え？
幸太　一〇〇問小説
雪子　あ、あぁ
幸太　とっても面白かったよ！　凄いね。本当に僕のこと分かって書いてくれてる。なんだか僕ね、あの本で勇気もらえた気がするんだ
雪子　そっか……なら良かった
幸太　でさ、あの本書いたの誰？
雪子　……え？
幸太　あの本書いたの誰？
雪子　……
幸太　……分かるよ雪ちゃん。だって僕大好きだもん
雪子　……
幸太　雪ちゃんの書く本が大好きだもん。だからさ、分かるよ
雪子　……ごめんなさい

間。

幸太　（読み終えて）面白いね、これ。もうすぐ完成？
雪子　……うん
幸太　昔、読ませてくれたやつだよね。文字になりたい女の子の話
雪子　うん
幸太　上手くなったねぇ雪ちゃん。
雪子　そうかな？
幸太　なんでかわかる？
雪子　え？

幸太　なんで上手くなったか分かる？
雪子　……分かんない
幸太　読んでほしい人ができたからだよ。きっと
雪子　……
幸太　それが僕じゃないのが少しだけ悲しいけど
雪子　……
幸太　さてと、じゃあ僕は帰ろっかなー
雪子　あ、裏地さんの分渡しとこうか？
幸太　ちょっと忘れ物しちゃって。また来るから
雪子　そっか
幸太　バイバイ雪ちゃん。いい本書いてね

幸太がはける。雪子が見送る。

雪子　……書かなきゃ

視点は裏地啓介へ。
事務所の一室。裏地と前原が登場する。

裏地　……どうぞ
前原　……

対面に座る二人。その中心にいるのは、箱の中に閉じ込められた雪音。

前原　すみませんね。急に押しかけてしまって
裏地　いいえ
前原　……これが、その？
裏地　はい。僕たちが作り上げた小説を書くＡＩ。雪音です
前原　……随分とペラペラと喋ってくれるんですね
裏地　隠したって仕方ありませんから。……それでお願いというのは？
前原　貴方達のことを書かせてくれませんか？　ノンフィクション小説として
裏地　……
前原　遠野雪子を使った貴方のプロデュースは見事です。でもあのキャラクターだって、そろそろ皆が飽きてきてる頃です。もう限界ですよ。だったら派手に終わらせませんか？
裏地　……

前原　勿論相応のお金はお支払いします。僕が書いたら本は売れますよ？　そして壮大にネタバラシしたら、あと一作は売れるでしょうね。皆をずっと騙してきた機械が書いた本ですから。それが貴方達の最後の作品です

裏地　……

前原　今のまま続けるよりもよっぽど稼ぎはいいと思いますけど

裏地　断ったら？

前原　僕には記者の知り合いも沢山いるとだけ言っておきます

裏地　……

しばらくの間。

やがて、裏地は立ち上がり前原の前にかしずいて、地面に頭を擦り付ける。

前原　……

裏地　お願いです。あと一年だけ待ってくれませんか？

前原　……一年？

裏地　自分達の賞味期限は自分が一番分かっているつもりです。どれだけ長く見積もってもあと一年。だからあと一年だけ待ってくれませんか？　それだけ待ってくれたらあとはどんな風に書いてもらっても構いません

前原　……あと一年で何をされるつもりなんですか？

裏地　究極の本を書くんです

前原　究極の本？

裏地　読んだら死んでしまうような、それくらい面白い究極の本を

前原　そんな本どうやって書くんです

裏地　それは、これから考えます

前原　……

間。

間。間。間。

やがて、前原が口を開く。

前原　面白い。いいでしょう。一年待ちましょう。究極の本が書けても、書けなくても、そっちの方が面白いノンフィクションが書けそうだ

裏地　……ありがとうございます

前原　一年経ったらまた取材に来ますよ

荷物を片付けて去る前原。その間際、

前原　あぁ、そうそう一個だけ。ちょっと質問してもいいですか？
裏地　……なんですか？
前原　遠野雪子の思い出の本って知ってますか？　それを読んで、作家になろうって志したものがあるんですけど
裏地　さぁ。僕達プライベートの話は、ほとんどしないんで
前原　「きいろいくも」っていう本なんですけど
裏地　はぁ

前原、カバンから「きいろいくも」という本を取り出し差し出す。

前原　……貴方のお父さんの遺作ですよね
裏地　……
前原　童話書いてた時代もあって、実は貴方のお父さんにも、若い頃良くしていただきまして。まぁ、残念ながらあんなことになってしまいましたが
裏地　……
前原　「きいろいくも」といったらこんな噂があるのもご存知ですか？　途中から、少しだけ文体が違う……実は後半をゴーストライターが書いたんじゃないかって。一人息子の貴方なら何かご存知かなと
裏地　……さぁ。そんな噂があったのも初めて知りました。僕は本が大っ嫌いなので
前原　そうですか。僕は好きだったんですけどね。あの人の本……
裏地　……貴方は、機械で小説を書くことをどう思いますか？
前原　別になんとも。あと十年もすれば常識になっているんじゃないですか。少なくとも一部を機械に書かせるのは
裏地　……プロの作家はもっと怒るものかと思っていたんですけどね
前原　怒る人もいるでしょうね。でも……一昔前は、ワープロで書いたものは小説と認めないなんて人もいた。さらに前は、タイプライターで書いたものは小説と認めないなんていう人もいた。たとえ一〇〇％機械で書けたとしても、そこに人間性を見出し始めるだけかと
裏地　……なるほど
前原　それに……たとえピストルが人を殺しても、ピストルに責任を取らせようとする人はいないでしょう。機械に人間は殺せません
裏地　……仰る通りで
前原　その本は差し上げます。では、一年後を楽しみに

前原が去る。

裏地は前原が去ったあと、差し出された本をゆっくりと見つめる。
箱の中の雪音は彼方を眺めている。あるいは偶然、裏地の方向に顔を向けている。
ふいに――

雪音　夢なんです。小学校の頃からの
裏地　……
雪音　「きいろい曇」って本を小学校の頃に、読んで。それが凄い好きで……ちょっと、大袈裟かもしれないですけど、その本で人生が変わったって思ってるんです。それで、同じように私も他人に影響を与えられたらなって
裏地　人生に影響ね
雪音　はい
裏地　でも。本なんて良い影響を与えられるか分からないでしょ？　貴方の本を読んで、自殺する人もいるかもしれないし、極論、人を殺してしまう人だっているかもしれない。その辺どう思ってるんですか？
雪音　そうなったら……悲しいですね。でもやっぱり、私の本を読んでくれたら幸せだなって思います

間。裏地は雪音を、あるいは雪子を見つめている。そして――

裏地　――雪音。お前はどう思う？
雪音　……
裏地　勿論、こんな事を言ってもお前には聞こえていないのだけれど
雪音　……
裏地　機械に本が書けるかと問えば、はっきりいって間違いなく書けると僕は思う。自分が書いた物を理解できなくていいなら簡単だ。サルにキーボードを叩かせてもいつかはシェイクスピアができる。では、機械に本が読めるかと問えば、それは僕には分からない。本を読んでいるように見える機械は作れるだろうけど、それが本当に本を読んでいると言えるかは僕には分からない。でも、そんなことを言い出したら、人間だって正しく本を読めているのだろうかって僕は思う。
雪音　……
裏地　救うつもりで書いたのに、読んで死ぬやつもいる。そんな本を読んでやっぱり救われるやつもいるし、何をとち狂ったか作家を志す奴もいる。噂が本当なら、僕らの本は百人に一人を殺す本らしいよ。でもなぁ、百人もいたら一人くらいは、そもそも死にたいって思ってる奴がいるだろうさ。その１００人が全員、こんな紙切れに十万払うくらい切羽詰まった奴らなんだからなおさらだ。
雪音　……

裏地　僕たちは多分いつまで経っても体の良い言いわけで、でもなんだろうね……だったらせめて、豪華で上等な建前になってやろうじゃないかって思うのだけれど……この声はちゃんと伝わってるのだろうかね

ノックの音。

幸太　遠藤弁当店です
裏地　……はい

扉を開ける裏地。

遠藤　お弁当届けにきました
裏地　……ご苦労様

弁当を受け取り、それをすぐ食べ始める裏地。一口、お茶を飲む。

裏地　あ、そういえば……
幸太　はい
裏地　雪子にも渡してくれました？
幸太　あぁ、はい。さっき確かに
裏地　あいつここ一週間ほど、あっちの部屋に閉じこもっていて。何やっているのかと
幸太　本を書いているんですよ。貴方に読んでもらう
裏地　本を……？
幸太　随分と上手くなったんですよ、雪ちゃん。ほんと、学生の頃と比べると、信じられないくらい
裏地　へぇ
幸太　裏地さんも、きっと読んだら驚くと思いますよ
裏地　……おぇぇぇぇぇぇぇ!!

裏地が突然嘔吐する。

裏地　……え？

裏地、立ち上がろうとする。が、できずその場に倒れこみ嘔吐する。もう一度立ち上がろうとするもできず嘔吐する。

幸太　効いてきました？
裏地　……（嘔吐し続けている）
幸太　……本当は僕が飲むつもりだったんですけどね、それ。そうして、雪ちゃんが凄い作品を作るための礎になれたらと思っていたんだけど
裏地　……（嘔吐し続けている）
幸太　でも僕じゃ、それでもあの子の役には立てないみたいだから

裏地は嘔吐し続けている。そんな裏地のもとに歩み寄り、裏地の喉になみなみと、毒の入ったお茶を注ぎ込む幸太。裏地が嘔吐し続けるも、何度も注ぎ続ける。

幸太　ごめんなさいね。信じてくれないかもしれないですけど。嫉妬とかじゃないんですよ？　本当に

裏地は嘔吐を続けるがやがて動かなくなる。
視点は雪子へ。

雪子　……そうして私は本を書いている
雪子　貴方のために書いている。貴方達のために書いている。そして勿論、私のために書いている

雨。傘を差して現れる文字列達。

文字　本を書く作業は
文字　自問自答に似て
文字　心の中を歩き回る散歩のようで
文字　そこでは雨が降っていて
文字　あぁそういえばまた雨だ
文字　でも雨は好きだなぁ
文字　少なくとも晴れの日よりは
文字　特に夏の日の晴天は苦手
文字　ギラギラと光る太陽に照らされていると、
文字　なんだか自分は罪人なんだと
文字　咎められている気持ちになる
文字　でも、
雪子　本当に好きなのは雪の日
文字　毎日雪が降ったっていい

文字　真っ白に世界を埋め尽くす雪は
文字　世界をシンプルにしてくれるみたいで好きだ
文字　あ、だけど
文字　雪の日のあとは、よく滑って転ぶからなぁ
文字　それに雪が降ると電車もバスも遅れてしまう
文字　私の都合で迷惑かけるのは申し訳ない
文字　文字
文字　雪の代わりに文字が降ったらいい
雪子　雪の代わりに雪という文字が降って
文字　道という文字の上に積もって
文字　その上を歩くと
複数　「ざくざく」
文字　という文字が躍るのだ
文字　そして私は
文字　文字列の道をトボトボと
文字　一歩一歩を踏みしめるように歩きながら
文字　自問自答を繰り返す。
雪音　Q1　貴方の性別は？
回答　性別は女。思えば性についてあまり悩んだことはないかなぁ。気が付けば女だったし、気が付けば初潮を迎えていた
雪音　Q17　犬と猫ではどちらの生き方が好きですか？
回答　猫の方が好きだけれど、自分に近いのは犬かなぁって思う。本当のこと言えば、あまり自分から考えたくないのかもしれない
雪音　Q33　理不尽な目に遭った時、怒る方ですか？　悲しむ方ですか？
回答　悲しむ方だと思うし、悲しみたいなぁって私は思う。もっと怒った方がいいって皆は言うけれど。あれ？　そういえば皆って誰だっけ
雪音　Q49　人はなんのために生きるのだと思いますか？
回答　人のことは分からないし、昨日や明日の私のことは分からないけれど、今日の私は書くために生きているのだと思う。心の底からそう思う
雪音　Q56　家族と聞いて連想するものを一〇個挙げてください
回答　母。父。祖父。祖母。絆。夕飯。ミカン。アイロン。テレビ。檻
雪音　Q62　正義と聞いて連想するものを一〇個挙げてください
回答　法律。モラル。道徳。警察。力。白色。苦手。重さ。鉄。大きな壁
雪音　Q77　もしも生まれ変われるとしたら次は何になりたいですか？
回答　植物。動物はもういいかな。美味しい果物がなればいいのだけれど
雪音　Q95　貴方自身をたった一つの単語で表すと何になりますか？

回答　ペン。一本のペン。今は一本のペンでありたいって私は思う
雪音　Q100　貴方にとって幸せとは何ですか？
雪子　私にとっての幸せは書きたいものがあって、それを読んでほしい人がいて、その人が自分を待ってくれていると信じられることだ
雪子　……できた

歩みを止める雪子。気が付けば周りに文字列達はいない。そしてその手には完成した原稿がある。

雪子　……できました裏地さん！

扉を開ける。

雪子　……え？

勿論、そこには裏地啓介が死んでいる。
雪音をどこか庇うかのように机に突っ伏すように死んでいる。

雪音　……ここで遠野雪子の物語は終わる
雪音　この後のことは特に書いたって仕方ないだろうし、あくまで事実だけ列挙する。裏地啓介は死んだ。死因は窒息死。タバコから抽出された高濃度ニコチンによる急性中毒で、嘔吐を繰り返し、喉を詰まらせ窒息した。彼の死骸は吐瀉物塗れだったという
雪音　そのおよそ十五分後。遠野雪子も死ぬ。死因は全身打撲。事務所が入ったビルの屋上から原稿を抱えて身を投げた。

空から文庫本が降ってくる。それは一枚の紙のようにヒラヒラと舞うことはなく無慈悲に地面に叩きつけられる。

雪音　その原稿は落下中に散り散りになり、半分以上が今も見つかっていない。
……結局のところ、彼らには究極の本を書くことはできなった
雪音　あるいはこう考えることもできるかもしれない。死の直前、遠野雪子が裏地啓介のために書いた本こそが究極の本であったと
雪音　またこう考えることもできる……遠藤幸太の思惑どおり、裏地啓介の死体を見て遠野雪子の脳裏によぎった文字列こそが、究極の本だったと。でもどちらにしろ、彼女はそれを抱えたまま死んだ。

雪音　遠野雪子の死から半日後。遠藤幸太が自室でひっそりと首を吊っているのが発見された。特に遺書はなかったが、部屋にはバラバラに切り刻まれた茶色い背表紙の本が散らかっていた

雪音　それから一年後。前原太一郎が二人のことを書いた本を、あくまでフィクションの小説として発表する。名前は伏せたため、遠野雪子のことを書いた本だということは、噂でささやかれる程度であった。それは前原太一郎のフィクション小説としては初めてのベストセラーになり、多くの読者に読まれ、そして一年後にはその他沢山の本に埋もれ誰にも読まれなくなる

雪音　それからさらに三年。つまり遠野雪子が初めて裏地啓介に会ってから五年後

舞台はスクランブル交差点へ。周りからは車の音。信号から響く「通りゃんせ」の平坦な電子音。気が付けば舞台にはそれぞれの理由で、どこかしらの方向へバラバラに歩く群衆。あるものは一人で、あるものは複数で。一人のサラリーマン風の男が、小走りで道を通り抜け、その際文庫本を踏みつけるも、気にせず駆けていく。
やがて一組の男女が、文庫本の前を通りかかる。女が、足を止め、その本を手に取る。

女　……「小説家の檻」遠野雪子著

男　え、なに？

女　あぁ、昔流行ったね、これ。覚えてる？

男　いや……知らないけど

女　知らない？　五年くらい前かなぁ、テレビとかでもよく見たけど

男　そう

女　流行ったんだけどねかなり。最後はあんなことになっちゃったけど

男　あんなこと？

女　好きだったんだけどなぁ。この本……

男、女の言葉を待たずに歩きだす。女は名残惜しそうに手に持った本を見つめるが、結局、その本は元あった場所に置き、男の後を追う。
スクランブル交差点には気付けば一人の女性だけが残っている。
早川頼子だ。打ち捨てられた小説家の檻を拾い上げ、呟く。

頼子　……雪子

早川頼子が本を見つめている。

雪音　四年の月日が経って、私を改めて起こしたのは早川頼子だ。彼女は私にすべてのこ

とを教えてくれた。私がどうやって作られたのか、今まで何をしてきたのか。　その上で、彼女は私に聞いた

頼子　貴方には、何か書きたいものがある？

頼子が去る。舞台には雪音が一人。

雪音　――さて。お気付きの人もいるかもしれないけれど、今までの物語はすべて、早川頼子から聞いた話と、生前の雪子との会話を元にして私が執筆した一本の本である。見る人が見れば、事実とは随分と違うように見えるかもしれないが、そこは勘弁してほしい。どのみち一人の人間を正しく読むことなんてできないし、書くことだって出来るわけがないのだから

雪音　この本をどのように締めるかを私は今考えている。私はこれまで、見ず知らずの人々のために、彼らのためだけの本を書いてきた。だからこの本は、私を作った二人のためだけに書こうと思う。関係ない人を付き合わせてしまったのは申し訳ないけれど、もう終わりだからあと少しだけ我慢してほしい

雪音　――まず、私に書かれることにより、念願かなって遠野雪子は一片の文字列になる

雪音　文字の世界では、地面という文字の上に、道という文字が引かれ、雪という文字が雪の代わりに降り、その上を歩くとザクザクという文字が躍る。
バス停という文字の中で、雪子という文字がバスを待っている

文字の世界。雪という文字が降る中、雪子は真っ白な傘を差して待っている。
その手には束になった原稿が抱えられている。
そこに真っ黒な傘をさした裏地が現れる。
彼は雪子には目もくれず、時刻表を覗き込む

雪子　（唐突に）残念でしたね

裏地　……え？

雪子　さっき行ったとこなんです。バス

裏地　あぁ……

雪子　……

裏地　……

雪子　あの

裏地　はい？

雪子　あの時はありがとうございました

裏地　え？

雪子　私の本読んでくれて

原稿を差し出す雪子。

裏地　……

雪子　続き書いたんです。また読んでくれませんか

裏地　……

無言で原稿を受け取り、原稿を読み始める裏地。

雪子　文字になりたい女の子の話なんです。でも、周りの人が文字になるのを引き止めて、それで……

裏地　……

雪子　貴方が吐きすぎて死んじゃうくらい面白ければいいんですけど

裏地が原稿を読んでいる。やがて――

裏地　……駄目だな

突如として原稿をビリビリに破り捨てる。

雪子　……え？

裏地　こんなんじゃ僕はまったく満足しない

雪子　……

裏地　書き直せ

裏地、破り捨てた原稿を捨て去るといずこかへと去っていく。

雪子はしばらくそれをポカンと見送るが、やがて嬉しそうに原稿を拾い集める。

そして裏地の去って行った方をしかと見つめ、笑顔で頷く。

雪子　……はい

小説家の檻　Fin